成長の姿

――現在小学校三年生――

村田修子

子どもの成長発達をみていると、いろいろの型があるのに気がつく。幼稚園に二年なり三年いる間にいろいろの経験をしていくが、それをとおしてみていると、その組を構成している三十何人もの間に、「巾」というものができてくることがはっきりとわかる。

俗にいうと、生活全般にはりがあって指導する者にどんどんついてくる型、今はまだはっきりとあらわれてきてはいないけれども、のびる素質を多分にもっていて、これからが楽しみであるという型、すべてにとりたてていうことのない、いわゆる標準型、ものの、のみ込みが他の人よりおそく、指導者が注意してみてやらなくてはならない型、また、生れ月がおそいため手がかかる型、など、幼児の時期はこのようにたいへん個人差がある。

幼児の時期から少しとんで、おとなの場合を考えると、そういうことはあまり表面に出てこなくなってしまう。幼児時代とは反対の立場で生活していく場合があることも、しばしば経験する。たとえば、社交性に乏しく、友だちなどもなかったような人が、人と接することの多い仕事で成巧していたり、音楽などに関心のなかったような人が、音楽家になったり、という場合もたくさんある。だからこの間に、どのような変化の系路をとおるか、ということは興味深いことである。

そこで、当園からは、お茶の水女子大学の小学校にすすむ人が多いので、その人たちが、何年かたった今日、どのような成長の姿をみせているか、ということを知るのは、受持った両方の側からいって、興味のあること、と思われるので、小学校の先生がたと、そういう連絡会をもつことにした。

そこで、幼稚園で受持った先生がそろっている学年でないと、いろいろの資料が完全でないので、それらを考慮に入れて、三年生について話しあった。

先ず幼稚園の側から、こういう型の人は年令がすすむにつれてどうなるものか、という問題のある人についてはなしを出した。

○幼稚園の側から

Ⓐ能力的に問題があるわけではないが〝自分から話し出す〟ということがほとんどなく、大きい声をきいたことがない、という極く静かで子どもらしく遊ぶことのなかったAさんについては、

三年生になった現在も口かずが少なく、友だちと特別親しくすることがない。が何でも皆と同じようにして、必要なときは小声ながらも、話しをするので、何の問題もない。けれども、もう少し友だちと話し合いのようになることを望んでいる。ということで、大体幼児時代の姿そのままに成長していた。

Ⓑ智能テストをすると一七〇以上を示すBさんは、子どもらしい夢もあり、物ごともよくわかり、知識も豊富であったが、いろいろの原因から小学校へ進学する直前まで集団の中に入ることができなかった。仲間に入りたい気持はじゅうぶんあるが「入れて」「遊びましょう」とことばで言えないために、相手の人を引張ったり、押したり、はてはつねったりするため、はたでみていた他の人に「いじめた」と解釈されて泣かされてしまう、という状態であった。

また、運動面の発達がおくれていて、全体的にゆっくりしていたけれど、自分が他の人より劣る、と思うと、幼児とは思えないような努力をして、何とか同じようにやっていく、というよい点をもっていた。が何といっても、社交性に欠ける点で心配していた。

学校にいっては指数が示すように、学科の方は勿論何の心配もなく、体格も頑丈になってきて、一、二年の頃より友だちもできてきた。それに、小学校となると、学科ができる　ということで、友だち間の見方というものがちがってくる　という傾向があるので、そういうことからも今後ますます友だちが多くなってくると思われるので心配はしていない　ということであった。

Ⓒにこにこしていて、友だち遊びもなんでも普通にできるが、気が弱いことからすべてに自信がなく、人によりかかっているようなCさん。これだけでは別にとりたてる問題がないようであるが、

気にかかる原因があった。
それは、入園のためのテストのときの印象は、何もかもすべて、てきぱき　とやってのけたようで、そういう気性の人と思っていたが、入園してからちょうど妹さんができたため、おばあさまに送り迎えをされていたが、離れるのに一番長くかかり、六月頃まで泣いていた。その間になぐさめてくれるお友だちができてそれ以来、ずっとその人たちと遊んでいたが、出発点が悪かったのと、妹さんができたことや、気の弱さが重なったためか、いっこうに積極的でなく、何でも人のあとについていく、という感じで、期待はずれの感じであった。

小学校でのようすは、ひきつづき自信のないようすで、ちょっとしたことにも泣くことがあって心配しているが、このところちょっと積極的になり、よくなってきた、ということで、今後の変化に注目している　ということであった。

ⒹDさんは、生活面・能力面・家庭環境面のどこからみても問題のあるお子さんであった。この人は、小学校にいくまでいろいろのことがあったので、ちょっと長くなるが、幼稚園時代のようすをこまかくあげることにする。
二年保育の五月頃まで一人っ子で、母親はどちらかというと物事に熱中する型であった。状態は、三才児時代から言語がはっきりとしないで、口で言うよりも、手を使った方が早い　というようすで、友だちからは、乱暴する人　と恐れられていた。することも、一人でするというよりも、同じ傾向の友だちと二人でくっついて、ちょっと常識はずれのようないたずらをした。三年保育の終り頃、「妹が生れるのを楽しみにしている」という話しではあったが、しっと心　というものがはっきりわかる言動を示した。たとえば、朝、送ってきた親からはなれなくなり、私は毎朝、眼鏡をはずして危険なことがないように覚悟をしてから、お母様からだきとる。すると五分もたたないうちに、いたずらをはじめる。ということが、三学期中ずっとつづき、まんなかの組になってからもそうであった。また、ある朝は、生れる赤ちゃんのために用意した靴下の片方をポケットに入れてきて、「もってきちゃった」と見せたりした。
こういうとき、いたずらをする相手のお子さんにも妹ができた。そしてそのお子さんがまた、人一倍しっと深かったため、二人でなおくっついて競争のように、手のかかることばかりをしていた。
二年目の半ば頃から、それが幾分少なくなり、いくらか友だちと遊べるようになったが、みんなからは相変らず、乱暴者　と思われていた。困ったことは、五才になっても、することはすべてゆ

っくりで、何でも一人ですすんですることはなく、あまり口をきかないので、既に誰でもができるようになった生活発表も、うたを歌うこともしなかった。劣等感のつくことを恐れて、何とか自信を持たせようとしたが、なかなか一すじにはゆかず、そのうち、小学校の入学試験も近くなり、親のあせりは一通りではなかった。

そこで同級生のお父様のところへ児童相談にいき「今までの環境を全然かえなくては効果はあがらない」という結論になった。これは、家庭ではなかなかできないことなので、結局、同級生のうちにそのお子さんをあずけることになった。

その家の環境は、両親と男の子（三年生）と女の子（Dさんの同級生）で、生活程度も大体同じようなうちであった。

この期間は十月半ばから、二学期の終りまでの二カ月近くであった。その間いろいろあったが、行った先の兄妹との年令関係がよかったこと。特別扱いをせず、自分の子と同じように扱ってくれたこと、幼稚園でも、その子となら気易く話せるし、またそのお子さんがいろいろ世話をしてくれて相手になってもらえることなどで、今までと違う経験をしたためか、幾分自信を得たようすになってきた。

そして三年目の二学期、順番にまわってきた生活発表のとき、私との根くらべのように長い時間かかったけれども床をはうようにして前に出てきて「昨日、誰と何をした」と言うことに成功した。

また、体格はよい方だったので、他の人がまだできなかった運動ができたことになお自信を得て、だんだんに友だちと話しをしたり、皆の中にまざるようになった。従って、顔つきも明るく、幾分はっきりとした感じになってきた。

三学期は自分の家に戻ったが、あともどりすることもなく、三月のお節句の集りのときは、一つの紙芝居のしめくくりを立派にやった。

三年間にこういう変化を示し、半分実験ともいえるような方法をとって、やっとそこまでいった人だったので、何につけても他の誰のことよりも、一番気になる人であった。

ところが、小学校へ進んでから、結局、環境になれにくい人なので、始めはやはり、幼稚園での最初と同じようすに戻ってしまったようで、何かの話し合いのときは常に話題に上ってきた。

その間、絵画にすばらしい才能を示し、展らん会に入選したり、教科書の中に採用されたりして、その方面の自信は大したものになった。がその他は、授業中に本を出さなかったり、常に問題にされていた。

三年生になり、周囲のお友だちも考え方がおとなになり、その子を理解しようとするようになったためか、子どもたちの話し合いの中で

「Dちゃんは、お友だちになりたいから、いろいろのことをするんだから、みんなが友だちになって遊べばいいんだ」

といい出す人もあったそうで、こういう周囲の働きかけもあって、近ごろたいへんよくなってきている、ということであった。それにしても、当事者は勿論のこと、まわりの子どものこうした成長の姿は、本当に尊いものに思えた。

話し合いはもっと多くの人についてされたが、まとめてみると、幼稚園という性格上、また、幼児という時期の特徴から、幼稚園側で問題とするのは、性格・行動　という面がたいへん重みをもっており、小学校側では、能力面に重みがあって、前者はそれに付随した、従のものとして扱われている、という感じがはっきりとしている。

行動の面では、三年年ぐらいでは、幼稚園時代とたいした変りはないようであった。

能力の面でも、大体が幼児時代のかおりをとどめていた。けれどこの面は長い間に、まれに全然ちがった変化をする人がある。この原因を考えると、生れ月による変化ということが一番はっきり出てくるように思われた。

たとえば、四月生れと三月生れとでは、幼い時代ほど、その差がたくさんあるが、五、六年ぐらいになると、差があまりなくなる、といわれる。この間の成長の変化によって、幼稚園時代の観察とかわってくるのが、大きなかわりかたのようであった。

また家庭環境については、幼稚園にいる間に親と接することによって、いろいろと分ってくる。

たとえば、提出物をきちんとしない傾向のある親、熱心すぎて、それがかえって逆の効果になっている親　など、いろいろである。そしてそういうことについては機会をとらえて指導しているわけであるが、おとなは、なかなかそのもっているものを変えるということはむずかしいらしく、この点、小学校側からも、幼稚園時代気になっていた人たちの名前があげられてきた。やはり変らないものだ、と思うとともに、子どもの成長の姿と、おとなのそれとが何か対象的で面白く思われた。

＊　＊　＊